

# 多変量コーシー分布と等角写像

加藤 昇吾 数理・推論研究系 准教授

はじめに

## 研究の背景

1変量コーシー分布について、以下の結果が知られている。

【定理】(McCullagh, 1992)

確率変数  $X$  が1変量コーシー分布

$$f(x) = \frac{1}{\pi} \frac{|\sigma|}{\sigma^2 + (x - \mu)^2}, \quad x \in \mathbb{R}; \quad \mu, \sigma \in \mathbb{R},$$

に従うとき、 $X \sim C(\mu + i\sigma)$ とあらわすことにする。ここで、 $i$ は虚数である ( $i^2 = -1$ )。このとき、

$$X \sim C(\theta) \implies \frac{aX + b}{cX + d} \sim C\left(\frac{a\theta + b}{c\theta + d}\right) \quad (1)$$

が成り立つ。ここに、 $\theta = \mu + i\sigma$ ,  $a, b, c, d \in \mathbb{R}$ ,  $ad - bc \neq 0$ 。

(1)においてあらわれた変換  $\theta \mapsto (a\theta + b)/(c\theta + d)$ は**メビウス変換**とよばれる。メビウス変換は複素平面上的等角写像として知られる。

## 研究の目的

上記で述べた結果は、1変量コーシー分布に関するものである。

本研究では、 $(\mathbb{R}^d$ 上の)多変量コーシー分布について、上述の結果を拡張することを目指す。

## 多変量コーシー分布とメビウス変換

以下の議論は厳密には、拡張されたユークリッド空間  $\mathbb{R}^d \cup \{\infty\}$  上で考えられるべきであるが、紙面の都合上、本報告では  $\mathbb{R}^d$  上で考える。

## 多変量コーシー分布

$d$ 変量コーシー分布を確率密度関数

$$f(x) = \frac{2^{d-1} \Gamma\{(d-1)/2\}}{\pi^{(d+1)/2}} \left( \frac{|\sigma|}{\sigma^2 + \|x - \mu\|^2} \right)^d, \quad x \in \mathbb{R}^d, \quad (2)$$

で定義する。ここで、 $\mu \in \mathbb{R}^d$ は位置パラメータ、 $\sigma \in \mathbb{R}$ は尺度パラメータである。また、 $\|\cdot\|$ はユークリッドノルムをあらわす。

この分布は、通常の変量コーシー分布(自由度1の  $t$ 分布)とは異なっている点に注意する。

## $\mathbb{R}^d$ 上のメビウス変換

$\mathbb{R}^d$ 上のメビウス変換は以下で与えられる。

$$\tilde{g}(x) = A \left( \gamma \frac{x + a}{\|x + a\|^\varepsilon} + b \right), \quad x \in \mathbb{R}^d \setminus \{-a\}. \quad (3)$$

ここに、 $a, b \in \mathbb{R}^d$ ,  $\gamma \in \mathbb{R}$ ,  $A$ は  $d$ 次直交行列、 $\varepsilon \in \{0, 2\}$ である。また、 $\tilde{g}(-a) = Ab$  ( $\varepsilon = 0$ )、 $\tilde{g}(-a) = \infty$  ( $\varepsilon = 2$ )とする。

## $\mathbb{R}^d$ 上のメビウス変換の性質

(i)  $\tilde{g}$ は、以下の4つの変換から成っている：

$$x \mapsto x + a, \quad x \mapsto \gamma x, \quad x \mapsto Ax, \quad x \mapsto x/\|x\|^2,$$

(ii)  $\tilde{g}$ は  $\mathbb{R}^d$ をそれ自身に写す等角写像である。

(iii)  $\tilde{g}$ 全体の成す集合は、写像の合成を積として群をなす。

(iv) 特に  $d = 2$ のとき、 $\tilde{g}$ は(1)における複素平面上的メビウス変換と本質的に等しい。

## 複素数の拡張と新たな関数 [1]

多変量コーシー分布とメビウス変換の関係を調べる上で、以下の複素数の拡張を考えると便利である。

$$\theta = \mu + i\sigma, \quad \mu \in \mathbb{R}^d, \quad \sigma \in \mathbb{R}.$$

拡張された複素数  $\theta$ について、以下の新たな関数を定義する。

$$g(\theta) = \mu_g + i\sigma_g \left( \equiv A \left( \gamma \frac{\theta + a}{\|\theta + a\|^\varepsilon} + b \right) \right), \quad \theta \in \mathbb{R}^d + i\mathbb{R}. \quad (4)$$

ここに、 $\mu_g \in \mathbb{R}^d$ と  $\sigma_g \in \mathbb{R}$ は、

$$\begin{pmatrix} \mu_g \\ \sigma_g \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} A & 0 \\ 0 & 1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} \tilde{\theta} + \tilde{a} \\ \gamma \frac{\tilde{\theta} + \tilde{a}}{\|\tilde{\theta} + \tilde{a}\|^\varepsilon} + \tilde{b} \end{pmatrix},$$

である。また、 $\tilde{\theta} = (\mu', \sigma)' \in \mathbb{R}^{d+1} \setminus \{-\tilde{a}\}$ ,  $\tilde{a} = (a', 0)' \in \mathbb{R}^d \times \mathbb{R}$ ,  $\tilde{b} = (b', 0)' \in \mathbb{R}^d \times \mathbb{R}$ ,  $\gamma \in \mathbb{R}$ ,  $\varepsilon = 0, 2$ ,  $A$ は  $d$ 次直交行列とする。 $\theta = -a$ のときは、 $g(-a) = Ab$  ( $\varepsilon = 0$ )、 $g(-a) = \infty$  ( $\varepsilon = 2$ )とする。

(4)において  $\theta \in \mathbb{R}^d$ のとき、 $g$ は  $\mathbb{R}^d$ 上のメビウス変換(3)と等しくなる。

## 主結果 [1]

以後、 $\mathbb{R}^d$ 値確率ベクトル  $X$ が  $d$ 変量コーシー分布(2)に従うとき、 $X \sim C_d(\mu + i\sigma)$ とあらわすこととする。

$\mathbb{R}^d$ 値確率ベクトル  $X$ が、 $X \sim C_d(\theta)$ とする。このとき、

$$X + a \sim C_d(\theta + a), \quad \gamma X \sim C_d(\gamma\theta),$$

$$AX \sim C_d(A\theta), \quad \frac{X}{\|X\|^2} \sim C_d\left(\frac{\theta}{\|\theta\|^2}\right),$$

が成り立つ。ここに、 $a \in \mathbb{R}^d$ ,  $\gamma \in \mathbb{R}$ ,  $A$ は  $d$ 次直交行列をあらわす。また、 $C_d$ の引数における演算は(4)式にならうこととする。

これらをまとめると、以下を得る。

【主定理】(Kato & McCullagh, submitted)

関数  $g$ を(4)式により定義する。このとき、

$$X \sim C_d(\theta) \implies g(X) \sim C_d(g(\theta))$$

が成立する。

上記の定理において、特に  $d = 1$ のとき、冒頭で述べた McCullagh (1992)の定理と本質的に等しくなる。

## References

- [1] KATO, S. & MCCULLAGH, P. Conformal mapping for multivariate Cauchy families, submitted.
- [2] MCCULLAGH, P. (1992). Conditional inference and Cauchy models. *Biometrika*, **79**, 247-259.